
静かに主導権を

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かに主導権を

【Nコード】

N1699L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

鈴は康史を彼氏にゲットするべく機会を窺っていた。そして静かに気付かれないように主導権を握ろうとするが実は。高校生のラブコメです。

第一章

静かに主導権を

茶色の髪に童顔である。眉が黒くはつきりとしていてそれが茶髪と見事なコントラストをなしている。

人なつっこそうな顔とは裏腹にその背はわりかし高い。笑顔が零れんばかりである。

浅原康史は学校では女の子達の間で人気があつた。それはまずはこのルックスからである。

「しかもそれだけじゃないしね」

「そうそう」

その女の子達の彼についての会話である。

「弦楽部でもエースだし」

「バイオリン自分でも作れるしね」

「家がバイオリン職人なんだって」

「それもいい感じよね」

その特技や家の仕事も評判がよかった。お洒落に思われているのだ。

「しかもね。性格もね」

「穏やかだし大人しいしね」

「いい感じよね」

こんな風に女の子達の評判はよかった。それかなりである。

そしてである。そんな彼だから狙う人間も出て来て当然である。

その狙う人間とは。

「そうね。今度私ね」

「あんたアタックするの？」

「まさか」

「そのまさかよ」

こう言う女がいた。見れば背が高く茶髪をショートヘアにしてい

る。大きな目は少し垂れ目である。胸はない感じだが足は長く全体的なスタイルはかなり整っている。大きな口がこれまた見事に映えている。この娘も笑うとかなりいい感じである。笑顔美人というわけだ。

「浅原って今彼女いないわよね」

「彼氏もないらしいわよ」

「つまり完全なフリーよ」

「つまりは」

彼女、工藤鈴はそれを聞いて笑顔になった。それだけで周りを晴れやかにさせてしまう、そうした見事な笑顔をここでも見せるのであった。

「私が立候補してもいいのよね」

「まあそうなるわね」

「あんたも彼氏いないの」

「彼女も」

「まあ彼女はいるけれど」

鈴は冗談めかしてこんなことも言った。

「一人ね」

「ああ、北乃ちゃんね」

「莢香ちゃんとやっぱり」

「あの娘可愛いからね」

だからだと笑って話すのであった。

「つついね」

「まあ彼女はいてもいいけれどね」

「とりあえずはね」

実際にはそうした関係ではないのがわかってるから周りもこれで済ませてしまった。そこから話はようやく本題に入るのであった。

「それでよ」

「本当に立候補するの？」

「それで」

「そのつもりよ。本気よ」

その笑顔のままでの言葉である。

「実際にやってやるから」

「まあそれはいいけれどね」

「それ自体はね」

周りはそれはよしとした。しかしである。

「けれどさ。あんたクラスが違うし」

「しかも部活も違う」

「陸上部よね」

「ええ」

周りの言葉に対してまた頷く。事実だから余計にだ。陸上部では短距離走のホープである。背が高くしかも足が長いので彼女の陸上服姿は人気があったりする。青い半ズボンから出ているその足を見る為にわざわざ陸上部の練習を見る学校の男もいたりする。

「そうよ」

「接点ないじゃない」

「確かに」

皆ここで言う。

「少しばかり辛いけれど」

「どうするのよ」

「為せば為るよ」

しかし鈴はその笑顔をここでもそのままにして言った。

第二章

「為さねばならぬ何事もじゃない」

「つていうと動くの」

「ここは」

「そう、仕掛けるわよ」

今はっきりと宣言した鈴だった。

「絶対にね」

「ふうん、何か考えてるみたいね」

「秘策があるのね」

「その通り。秘策は幾らでもあるからね」

こんなことも言うのだった。

「まあ見てなさい。浅原は私がゲットするわ」

「けれどあんた今までそういう経験した？」

「彼氏とかいたことあるの？」

「ないわよ」

何とこう答えるのであった。

「彼女はいるけれど」

「はいはい、彼女はわかってるから」

「とにかくいないのね、彼氏は」

「今までも」

「そうよ。それでもこの時の為に考えていたのよ」

この年頃の女の子のおおよそがそうであるのと同じ様に彼女もなのであった。彼氏がいなくてもその作り方やこれからのことは考えていたのである。

「まあ見ていなさいって。やってやるから」

「ふうん、それじゃあ見せてもらおうわね」

「あんたのその」

「秘策ってやつをね」

こんな話をしていたのであった。かくして鈴は康史を自分の彼氏にすべく動きはじめた。まずは何気なく彼のクラスに行ってそのうえで言うのであった。

「あの、誰かいない？」

「あれ、七組の工藤じゃねえか」

「どうしたのよ」

すぐに彼のクラスの面々から声をかけられた。

「いきなりここに来てよ」

「何か用なの？」

「用があるから来たのよ」

ここでちらりと康史がいるかどうか見回す。見れば彼は自分の席に座って雑誌を読んでいる。野球の雑誌で阪神タイガースの月刊誌であった。

「ふうん、虎ね」

鈴はそれもチェックして密かに笑った。

「私も阪神ファンだしこれもいいわね」

しかしそれはとりあえず置いてである。鈴はさらに続けた。

「困ったことになったのよ」

言いながらさりげなく康史のところに向かう。そうして彼の前でさらに言うのだった。

「次の授業古典なのに古典の教科書忘れちゃったのよ」

「で、ここまで来たのかよ」

「誰か貸してくれてっことね」

「駄目かな」

康史の前で話す。話しながら彼を見るとであった。

目と目があった。実はその瞬間に彼女は目を笑わせたがそれは一瞬で消した。そしてそのうえでさらにその言葉を続けるのであった。

「誰か貸して欲しいけれど」

「ああ、それだったら」

康史は親切な人柄である。従って、であった。

「僕丁度持ってるし」

「あっ、いいの」

「よかったらね」

こう鈴に言ってきて実際に教科書を出してきたのである。

「どうぞ」

「有り難う、恩に着るわ」

「うん、じゃあね」

「それじゃあ」

こうして鈴はその教科書を受け取って一礼してから彼のクラスを後にした。そうして自分のクラスに戻って席に座るとである。何と教科書があった。

「うふふふふふ」

「教科書が二つ？」

「二つもあるの」

「作戦成功」

自分の席でにこにこしながら話す鈴だった。

「第一段階はね」

「ああ、成程ね」

「そういうことね」

彼女の周りの女の子達もここでわかったのだった。

第三章

「浅原のところね」

「そこに行ってきたのね」

「そういうこと。やっぱり貸してくれたわ」
「こう言ってまた笑うのであった。」

「大成功ね。これでね」

「そうなの。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「次の段階に移るわ」

にこにこしたまままでこれからのことを考えるのであった。

「さて、次はね」

「次は？」

「何か楽しくなってきたわ」

自分で自分のことがそうなってきたのである。完全に恋に染まっていた。

そうして授業の後である。鈴は康史のクラスに来てだ。彼に対して言うのである。

「有り難う」

「ああ、役に立った？」

「立ったわ」

そうだったと満面の笑顔で話すのである。

「助かったわ。有り難う」

「そうだったの、よかったよ」

「それじゃあお礼をしないといけないわね」

そして鈴は彼に気付かれないうちに次の段階に移ったのだった。

「あのね、いいかな」

「うん、何？」

「お昼だけれどね」

まずは些細なことを考えてである。彼女は言うのであった。

「お昼ね。奢らせてもらうわ」

「いや、いいよそれは」

康史はその申し出は笑って拒もうとした。

「こんなのよくあることじゃない」

「いや、そういう訳にはいかないのよ」

鈴はそれは許さなかった。まさに彼女にとって今の作戦の根幹であるからだ。それを逃がす程彼女は迂闊な人間ではないということであろうか。

「それじゃあね」

「それじゃあ？」

「お昼ね」

少し強引に決めてしまった鈴だった。

「お昼一緒に食べましょう」

「お弁当あるけれどいいよね」

「お弁当も一緒に食べたらいんじゃない」

やはりここでも強引であった。

「それじゃあ。お昼ね」

「うん、悪いね」

「だからこっちは御礼だからいいのよ」

こう話してそのうえでお昼の約束を取り付けたのであった。そうして皆ががやがやと楽しく食べている食堂で向かい合って座りラーメンを食べるのであった。鈴はラーメンがいいと言ってそれを頼んだ康史に対してこれまたにこにこしながら言ってきたのだった。

「浅原ってラーメン好きなの」

「うん、そうなんだ」

このことを実際に認める彼だった。

「実はね」

「そうなの。それじゃあね」

「それじゃあ？」

「美味しいラーメン屋知ってるわよ」

こう言ってきたのである。チャンスは逃さなかった。

「紹介していいかしら」

「何処のお店なの？」

「ええとね、ドライブインの近くにあってね」

「うん」

「そこで結構繁盛してるのよ」

そうしたお店だというのである。

「そこ。どうかしら」

「ふうん、ドライブインね」

「ラーメンは豚骨よ」

これも言うのであった。

「博多ラーメンっていうのかしら」

「あっ、博多なんだ」

それを聞いて明るい顔になった康史だった。

第四章

「博多なんだ、それじゃあ」

「豚骨好きなの」

「うん、好き」

本当に好きだと話す彼だった。

「実はね」

「そうなの。それじゃあ」

「うん、行きましよう」

こうして作戦の次の段階も決めたのであった。何もかもがである。これで鈴はまずはその日のうちにそのラーメン屋に向かい事前偵察にかかった。店の中は清潔なものでラーメン屋の油っぽい感じはない。そしてラーメンはというところ。

「あつ、これって本当に」

実は今まで店のことは知っていても食べたことはなかった。実際に食べてみると。

美味かったのだ。麺は細めでありコシもありスープがよく絡む。

そしてその豚骨スープは濃く熱いものでこってりとしている。薬味のゴマもいい味を出している。

そのラーメンを食べてにこりとなる。そうしてであった。

今度はそのラーメン屋やドライブインの周りも見回る。そこも偵察したのである。そのうえで康史を店に連れて行ってからのことも決めるのだった。

彼をその店に連れて行き食べるとである。やはり彼も言うのであった。

「美味しいね、これって」

「そうでしょう？本当に美味しいのよ」

前に食べたからこそ言える言葉であった。

「ここはね」

「そうだね。確かに美味しいよ」

「それでね」

さらに言う鈴だった。二人はカウンターの席で隣同士になって座っている。そこで明るい顔で学生らしく食べながら話すのであった。

「ラーメンだけじゃないのよ」

「ラーメンだけじゃないって？」

「ここってね」

にこにことした顔はそのままである。

「結構色々なお店があるのよ」

「へえ、そうなんだ」

「本屋さんもあるし」

それもあるのも見ているのだった。

「そこレンタルビデオも置いてるし」

「大きなお店なんだね」

「そうなのよ。その隣にはね」

「他にもあるんだ」

「ホットドッグ屋もあるのよ」

これも実際に見てのことなのではつきりと言えることだった。

「そこも美味しいから」

「ふうん、ホットドッグね」

「ホットドッグ好き？」

鈴はラーメンを食べながらであるが康史にさりげなくを装って尋ねた。

「それも」

「うん、嫌いじゃないよ」

こう答えた彼だった。ラーメンをすすりながらである。見ればスープも飲んでいいる。スプーンを上手く使ってそれでその豚骨スープも楽しんでいる。

「中にソーセイジもあってね」

「そうそう、ケチャップとマスタードがよく効いてるのよ」

「それがそのホットドッグなんだね」

「それでどうかしら」

ここまで話してあらためて彼に尋ねたのであった。

「行く？この後で」

「うん、それじゃあ」

実は彼はラーメンを食べてそれで帰るつもりだった。しかしそれに留まらなかったのだ。ここでも鈴は作戦を見事成功させたのである。

こうしてそのホットドッグを食べてみるとだ。康史はここでもその顔を綻ばせたのであった。

「いいよね、これも」

「そうでしょ？美味しいでしょ」

「うん、中国の食べ物でアメリカの食べ物っていうのもね」

「案外いいでしょ」

「不思議とね。そうだよね」

こんなことも言って笑う康史だった。

「合うんだね」

「そうなのよ。これが意外とね」

「水と油みたいで」

「実は違うのね。例えて言えば」

「例えて言えば？」

「あれね。お酢と油ね」

笑ってこんな表現を出した鈴であった。

第五章

「何かっていったらね」

「あはは、それだったらあれじゃない」

康史は今の彼女の言葉を聞いて笑いながら述べた。

「ドレッシングじゃない」

「ふふふ、そうよね」

鈴もそれに応えて笑う。彼女もわかって言っているのである。これも計算である。

「そういえばね」

「そうだよ。けれどね」

「けれど？」

「その通りだよね」

笑いながらこう話す彼だった。

「ラーメンとホットドッグって案外合うよね」

「そうなのよね。それでだけれどね」

「うん。どうしたの？今度は」

「こういうの食べたなら甘いものも欲しくならない？」

目の奥に微かな光を含ませた言葉である。ここでも彼女は勝負をしているのだ。

「何かね」

「甘いものね」

「そうよ。何かこう」

こうわざと言葉をワンクッション置いて話していく。

「大人しいというか気品のある甘さかしら」

「大人しくて気品のある」

「そういう甘さがね。欲しくない？」

「ううん、そういう甘さって」

「何となくだけれど」

ホットドッグを食べるのを少し止めて考える顔になった康史に対して言う。この辺りは既に偵察済みなのでここでも言うことは決まっていた。

「ほら、和菓子とか」

「和菓子？」

「そうよ。お饅頭とかね」

そういうものを出したのである。

「お団子とか。そういうのはどうかしら」

「あっ、いいね」

それを聞いて賛成した顔で応える康史だった。

「ラーメンもホットドッグも強い味だしね」

「だからね。デザートはね」

「落ち着いたものをつていうんだね」

「そうよ。それでどうかしら」

「うん、じゃあそれでね」

また微笑んだ顔になってそれから答える康史だった。

「和菓子でね」

「いいお店聞ってるのよ」

ここでは知っているとは言わなかった。聞いている、としたのである。

「あのね、ここから少し言ってね」

「うん、少し？」

「あっ、本屋は」

そのことも思い出してみせる。一応である。

「どうしようかしら」

「あっ、工藤さんがいいようにしたらいいよ」

「そうなの」

「うん、そこはお任せさせてもらうから」

心優しい康史らしい言葉であった。

「それでね」

「有り難う。それじゃあね」

微笑んだ鈴だがその微笑みは二つのものが混ざっている。一つは康史にそう言ってもらったからでありもう一つは自分の計算通りになったからである。その二つを混ぜてそのうえで微笑んでいるのである。

「まずはね」

「うん。まずは？」

「和菓子食べに行きましょう」

それだというのである。

「和菓子ね。それでどうかしら」

「うん、それじゃあね」

康史も微笑んで彼女の提案に頷いてみせた。

「そこにね」

「少し行くだけだから」

また康史に対して告げる。

「それでいいわよね」

「うん、それじゃあ」

こうして二人はホットドッグの後は和菓子に向かうことになった。ホットドッグを食べてからである。二人並んで歩くが鈴はここでそつと。自分の右手を康史の左手にやった。

そうして彼のその手を自分の手で。そつと握るのだった。

「いい？」

それから彼を見て問うのである。

第六章

「こうして。寒いから」

「寒い」

「ええ、だから」

ここでは弱い様な顔を見せる。

「いいかしら」

「いいよ」

康史は今も優しかった。

「それじゃあね。それで工藤さんが温かくなるんだったら」

「有り難う。それじゃあ」

こうして二人並んで進みそのうえで、であった。喫茶店の前に来た。そこは和風の静かな趣の店であった。緑ののれんがその雰囲気さをさらに出している。

「ここだよね」

「ええ、ここらしいわ」

偵察したことは隠して応える鈴だった。

「ここなのよ」

「そう。それじゃあね」

「ええ」

ここで鈴は店の前、道路を挟んで向かい合ったところはわざと見なかった。あくまで店を見た。そうして康史の目もそこから離れたのである。

こうしてから店の中に入ると。やはり店の中は和風であった。木の台と椅子が置かれお品書きが見える。そこにはしっかりと黒い筆で漢字や平仮名で商品名が書かれている。

その店の中の一つの席に向かい合って座り。また鈴が言ってきた。

「ここのお店ってね」

「うん」

「お抹茶がいいんだって」

「お抹茶が？」

「それで食べ物はお団子がいーらしいわ」

「こう彼に話すのである。」

「それはどうかしら」

「いいね。それじゃあね」

「ええ」

「その二つにしよう」

「ここでも鈴の言葉に素直に従う彼であった。」

「それでね」

「ええ。それじゃあね」

「そうだよ。お抹茶とお団子の組み合わせってね」

「いいわよね」

「そうだよ」

康史は鈴の言葉に笑顔で返す。ラーメンとホットドッグで腹が満ちているせいもあって彼はさらに温厚になっている。しかも甘いものを前にしてさらにであった。

「その二つってね」

「そうそう。それでお団子は」

「何がいいかな」

「黍団子あるわよ」

「それを出したのである。」

「黍団子ね」

「あっ、桃太郎の」

「そうよ」

「まさにそれだというのだ。やはり黍団子といえばそれであった。」

「それがあるけれど」

「面白いね。じゃあそれにしようよ」

「黍団子二つね」

「それとお抹茶もね」

「ええ、それじゃあ」

「それでね」

こう話して注文する。そのまま今度はその黍団子と抹茶を楽しんだ。そうしてから暫く店の中でとりとめのない話をしてから外に出る。そこで。

「ねえ、次はね」

「本屋に戻る？」

「そうする？」

実は内心は違う鈴だった。ここでわざと顔を前にやる。すると康史も自然にその顔を前にやってしまったのだ。その前にあったのは。
「あ・・・・・・・・」

彼はそれを見て思わず声をあげてしまった。それは所謂ラブホテルだった。ピンク色の白を模した何処か悪趣味な外観をしていて看板で時間だの値段だのが書かれている。

第七章

それを見て意識しないではいられなかった。鈴もここで言うてきた。

「ねえ」

「う、うん」

「私はだけれど」

わざと恥ずかしそうな声で言うのだった。

「別に」

「別に？」

「浅原がいいならそれでいいよ」

こう彼に言ったのである。

「それでね」

「うん。ええと」

ここで彼等から見て右手に歩道橋があるのにも気付いた。丁度いい具合にである。

「じゃあ」

「行くの？」

「いいんだよね」

鈴に対して問うた。

「それで」

「さっき言ったままよ」

これがここでの彼女の返答だった。俯いた仕草を作って答える。

「だから」

「わかったよ。それじゃあね」

「うん」

彼の手をそっと握るだけであった。今はそれで充分だと読んだからだ。

こうしてデートを終えた。その次の日である。鈴はにこにことし

た顔で皆に話していた。その笑顔自体はとても爽やかで可愛い。
「やったわよ」

「成功したのね」

「それで」

「ばっちりだったわ」

その笑顔で皆に話す。学校の屋上で賑やかに話している。

「もうね。これ以上はないって位にね」

「よかったじゃない、それだったら」

「成功して」

「事前に偵察してあれこれシュミレーションしててよかったわ」

そこまでしていたのである。

「それでその結果ね」

「成功したってことね」

「そういうこと」

まさにその通りだというのである。

「本当にね」

「それじゃああんた」

「ゲットしたのね」

「勿論よ。それも大成功」

鈴はその満面の顔でまた言った。

「だからこれ以上はないのよ」

「よくやったわね」

「策士ね、あんたも」

「だって。好きだから」

それが理由なのだという。彼女にとってはである。

「好きだからよ。ほら、女の子は恋をしたら」

「ああ、あのアニメよね」

「魔法使いになるってことよね」

「そうよ、超一流のね」

随分と古いアニメの話もするのだった。

「そういうことよ。とにかくこれで」

「大成功ね」

「浅原ゲット」

「優しいし顔もいいし芸術家だし」

鈴はもう完全に彼に参っている。

「本当によかったわ」

「よっ、この幸せ者」

「お熱いことで」

皆その彼女を肘でこづいてわざと冷やかす。その中で満面の笑みであり続けている鈴であった。しかしその頃学校の校庭の木の下では。

男達が集まっていた。そうしてこう話していた。

「昨日さ」

「ああ、工藤とだったよな」

「デートしたんだって？」

「聞ってるぜ」

男達が康史の話を聞いていた。皆木の下芝生の上に座りそのうえで話をしている。それぞれ好きな位置に座ってそこで胡坐をかいたり半分寝たりしている。

第八章

「それでどうだったんだ？」

「何か工藤はやけににこにこしていたけれどな」

「まああれかな」

言葉を一旦置いて話をはじめる康史だった。

「成功したっていうか」

「じゃあ付き合うのか」

「あいつと」

「うん、まあ僕も」

彼自身の話であった。

「工藤はいいかなって思ってたしね」

「じゃあいいじゃないか」

「なあ」

「相思相愛ってやつでな」

「相思相愛ね」

康史は今度はその言葉に反応して言うのであった。

「それだけれどね」

「何だ？何かあるのか？」

「それでも」

「いやさ、かなり露骨だったんだよね」

そうして苦笑いになって話すのであった。芝生の上で自分の足の裏を重ね合わせた胡坐の姿勢で座ったまま。こう言ったのである。

「もう何から何までね」

「露骨？」

「露骨って何だ？」

「あれなんだよ」

その苦笑いのまま話していく。

「もう何もかもを計算してさりげなくを装って何でも言ってくるん

だよ」

「計算してかよ」

「それでか」

「そうなんだよ。もうね、僕を自分の誘導に向かわせようとして」

「そうだったのかよ」

「あいつが」

「そうだったんだ」

この話をするのである。

「それがさ。随分と露骨でね。本人は気付かれないようにしてるんだけれど」

「ははは、じゃあ御前わかってたんだな」

「全部な」

「わかってたよ。けれどね」

それでもだというのである。

「それ言ったら駄目じゃない」

「駄目か」

「それは」

「そうだよ。工藤だって必死だったし」

そのことがよくわかったのである。そうしてであった。

「それにさ」

「それに？」

「何だよ、次は」

「僕も工藤好きだしね」

言葉は現在形だった。ここにもう答えがあった。

「丁度よかったしね」

「じゃああれか」

「御前にとっても願ったり叶ったりだったんだな」

「そういうこと」

まさにその通りだという。

「本当にね。よかったよ」

「向こうもそう言ってるぜ」

「絶対にな」

周りも笑いながら彼に言ってきた。

「策略成功ってな」

「それで御前をゲットしたってな」

「そうなんだよ。まあさ」

「まあさ？」

「今度はどうだっていうんだ？」

「あれだよ」

こう少しはつきりしない様な調子で言う彼だった。

「こういうのってのはね」

「どうだっていうんだ？」

「女の子を立てた方がいいみたいだね」

笑いながら言うのであった。

「気付いていてもね。いないふりをしてね」

「それで相手のペースに従ってか」

「そういうことだな」

「うん、そういうこと」

まさにそれだというのである。

「それが一番みたいだね」

「そういうものかな」

「男が引っ張るっていうんじゃ駄目なのか？」

「それもいいだろうけれど」

そのやり方についても否定はしなかった。しかしである。

「それよりもね。女の子を何も言わずに立てるっていうのもね」

「男の甲斐性ってか」

「そういうことか」

「そう思うけれどね」

こう話す康史であった。実は彼は全てわかっていて鈴と共にいたのであった。しかしそれはあえて言葉には出さない。そうしていた

のである。

そしてその彼のポケットから明るい音楽が流れてきた。今流行りの曲の着メロである。

「おい、携帯鳴ったぞ」

「工藤からじゃないのか？」

「あっ、本当だ」

携帯を取り出してチェックするとその通りであった。彼女からのメールであった。

それを見るとだ。今日の放課後またデートしようと誘ってきていた。

それを見た康史はだ。微笑んで言うのであった。

「じゃあ今日もね」

その微笑みは何処までも優しい。全てをわかったうえで受け入れている、そうした微笑みをたたえながら彼女からの携帯のメールを見ている彼であった。

静かに主導権を

完

2010・1・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699/>

静かに主導権を

2010年10月8日15時12分発行